

2023年12月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

欠席と書き迷ひみて鉦叩	朝田玲子
ひと手間をかけし団子の月見かな	仁田 浩
三年の時を嘸み締め秋かつを	大石高典
切り傷の手に手に芒なびかせて	森 壹風
左脳より右脳へぬくる蟬時雨	河村純子
蛇崩の山肌乾き虫の声	福江ちえり
約束の日を忘れてたりきりぎりす	中井昭雄
萩の風湧く社なり御所近く	竹中教子
可惜夜や月に地図読む夜間行	中島冬子
志ん朝の人情嘸秋の夜半	片山旭星
隅田川の水脈消す霽や震災忌	鴻坂佳子
雷声や豪雨災害伝承館	碓氷芳雄
青き血の匂ひ立つなり秋の鯖	牧田満知子
伝統の口上響く秋祭	宮原亜砂美
蓑虫の深き眠りや宙の果て	富沢壽勇
添削の冷泉為守秋夕焼	西五辻芳子
墓洗ふスカイツリーに朝日差し	谷口文子
消え残る足跡秋の汀かな	川内一浩
爺様が採つて来たぞと天狗茸	川上和昭

氷室集

夕涼や風紋崩れゆく砂丘	加藤広文
野良猫のするりと消ゆる猫じやらし	朝田玲子
秋高し戦なき間を喜寿となり	仁田 浩
背荷物を前に抱へて秋の空	加藤 剛
洞窟にのこる手形や秋の空	齋藤亜矢
寝筵にすこしはみ出る仮眠かな	大石高典
羽衣の絵本繙く良夜かな	富沢壽勇
復興を願ひ千尾のさんま焼く	碓氷芳雄
古酒を相楽しむと致すなり	谷口文子
だっこして背丈の重さ遠花火	佐藤慎一
千屈菜や遊び場となる休耕田	鴻坂佳子
鳥辺野の水を汲み上げ秋彼岸	竹中教子
一ノ橋渡れば解夏の御廟かな	田中白秋
汀女忌や日々修行なる空見上げ	河村純子
夜学生残る一人の灯かな	西五辻芳子
水撫づる色なき風の波紋かな	津嘉山 典
酒のあて不要なりとて新走	森川恵美子

魚信待てば秋雨だぼと滲み来て	牧田満知子
色鳥の声聞き分けて里の山	石上敦子
秋の蚊へ打つ手を止めてしまひけり	杉浦康子

2023年11月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

島の星見えねど夜半のハンモック	谷口文子
三伏の胎内にあり善光寺	河村純子
秋茜すいと地層はチバニアン	朝田玲子
辛口の査読の批評みちをしへ	大石高典
山の端に鴉の影や鳴子縄	碓氷芳雄
蚊帳畳む技のありけり忘れけり	仁田 浩
自転車のパンク八月十五日	富沢壽勇
不器用は言葉にできず星祭	森 壹風
行合ひの雲に朝顔小さく咲く	中島冬子
ばらばらの土偶のかげら秋の声	西五辻芳子
蝸や山の神より水賜ひ	竹中教子
初秋やそぞろに繰るも一ページ	中井昭雄
水底に八月の石拾ひけり	川上和昭
盆東風に友待つ隙の木蔭かな	田中 勝
赤まんま母の亡き子に母の役	前田鈴子
鮒追うて霧はふやうに沢を這ふ	牧田満知子
蟪蛄を甚振る猫に声荒げ	友永基美子
南へと雷雲走る京の街	片山旭星
鳥ごゑの満ちて土用のしじみ舟	鴻坂佳子
	氷室集
巨岩より小岩生まるる蟹の穴	大石高典
昼月は空に海月は海に浮き	加藤広文
単線の旅のゆるりと明治草	朝田玲子
悪しき虫良き虫ともに誘蛾灯	仁田 浩
恐竜やと指さす子ども入道雲	福のり子
星砂をひとつ手のひら夏終る	谷口文子
白雨なか通勤電車発車せり	中井昭雄
星ふたつ逢うてゐるらし天の川	津嘉山典
庭先の千草の花の入れ替る	富沢壽勇
パトカーのサイレンの音世阿弥の忌	河村純子
宵山やごみボランティア二千人	佐藤慎一
きらきらと遠白波や西瓜割	鴻坂佳子

戦国より火とぼし祭早星
落人の廢墟の跡や茅の輪立つ
慶州の古墳もつこり秋の空
鳩が来て山羊の餌を取る木下闇
水桶提げ祖廟の坂や万灯会
秋うらら看板のなき修理店
むづかる子寝かせに出でし星月夜
胸もとに不意の風あり今朝の秋

森川恵美子
田中白秋
小堀恭子
福江ちえり
竹中教子
西五辻芳子
大畑照子
加藤 剛

2023年10月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

熊楠の小さき庭の夏深し
四角なる御霊神社の茅の輪かな
ハンモック世の半分を空にして
雷声の音程の五度上がりたり
お千度や揃ひの柄の浴衣着て
祇園会や上り框に四斗樽
郭公のこゑ雑念を突き抜けて
松瘦せて梅雨雲広し有磯海
利尻島の明けの早さや夏の海
ヒロシマや夾竹桃の色深し
小さき手を祖母の背に添へ広島忌
頼朝が坐りさうなる円座かな
車ごと茅の輪くぐりのありたれば
夕凧のしじまに音の生まれ
祇園会や太刀振る稚児の白化粧
太陽にかざして子らの氷菓子
また海へ来てをり裸足晒しをり
蝶鮫月とや雲よぎる暑き湖
江戸時代は一つ一両折戸茄子

大石高典
小畠 和
仁田 浩
朝田玲子
中島冬子
牧田満知子
谷口文子
福江ちえり
中井昭雄
田中 勝
碓氷芳雄
川上和昭
鴻坂佳子
富沢壽勇
片山旭星
森 壹風
川内一浩
西五辻芳子
丹羽康夫

氷室集

大文字山の大的字虹立ちぬ
ポイントグラス重ねるパブの白夜かな
草蔭へ気配残せる蜥蜴かな
土用鰻わけても関西風の焼き
無蓋貨車連結二輛青田風
夏潮へ黄鰭ぐぐんと糸を引く
塩締め鯖はるばると貴船口

齋藤亜矢
福のり子
加藤 剛
朝田玲子
仁田 浩
大石高典
牧田満知子

祀られし清水の味の醍醐水	中井昭雄
ほほづきの鉢の乗り来る浅草線	鴻坂佳子
合掌の横顔涼し修行僧	伊東弥生
白南風の木立へ透くる風と声	津嘉山典
旅疲れして揺らしみるハンモック	河村純子
夏雲の幾重ともなる根なし山	森川恵美子
天守より緑雨滴る烏城かな	田中白秋
父の日や何とか読めるパパの文字	佐藤慎一
ブルキニてふ水着のどこかレトロめく	富沢壽勇
猛暑日や朝食を抜く検診日	原田久仁一
甘藍の巻きの固さに触れてみる	新藤克彦
お囃子の調べ速まる銚の辻	細見昌代
常の日は花柄シャツよ白緋	竹中教子

2023年9月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

	氷壺集
解禁の鮎ぎつしりと魚籠香る	朝田玲子
名人の技真似てみる夜釣かな	大石高典
草の斜面なれぬ鹿の子の独り立ち	小畠 和
黒南風や砂ひと粒が靴の中	仁田 浩
父の日よかつて贈りしピース缶	河村純子
梅雨晴や傘を刀に子らの駆く	碓氷芳雄
父の日や縁の淡き子と母に	中島冬子
栈橋の先けぶりたる芒種かな	森 壹風
鹿肉を削ぎて白夜を迎へけり	牧田満知子
虎耳草瀬音に風の白さかな	中井昭雄
緑陰や瀬戸の窯垣登りきて	宮原亜砂美
棋譜追ひをれど投了昼寝覚め	富沢壽勇
草色の眼を持つてをり夏の蝶	福江ちえり
形代や胸を撫づれば胸に風	竹中教子
梅雨茸のフェアリーリングしかとあり	丹羽康夫
実験を終えてプールへまつしぐら	谷口文子
野宮の祈禱符届く夏越かな	西五辻芳子
どくだみの花青みくる日暮かな	鴻坂佳子
裏切りの梅雨の晴間ぞずぶ濡れぞ	田中 勝
	氷室集
半夏生鯖とふ若狭浜の鯖	福のり子
昼の馬場ひとり駆くるや撒水車	朝田玲子

蟻蠊や袋の口をきつく閉ぢ
追星の光りて速し由良の鮎
天気図の皺の深さや臯月波
白南風の尾道港へ銀の道
どくだみの匂ひ親しと思ふ歳
鉄柵を三日離れず蝸牛
鹿の子の森へと消ゆる雨の朝
夏の蝶とろりと重き風まとひ
庭師らの午後の大事や三尺寝
夕立の音にその他の音の消え
紫陽花の毬や白磁の壺の艶
ふるさとによき糶あり冷し酒
鯖鮨に切り込み入るる手際かな
梅雨寒し潮のはやしと壇浦
影絵なる二階囃子をガラス窓
晴天を劈く雷の周波数
不意打ちの雨宿りなり梅雨の雷
水盤の波立ちをるに茎青き

加藤 剛
鳥居裕子
大石高典
仁田 浩
河村純子
小嶋 和
森 壹風
牧田満知子
富沢壽勇
碓氷芳雄
谷口文子
森川恵美子
中井昭雄
小堀恭子
細見昌代
津嘉山典
田中 勝
竹中教子

2023年8月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

葎引けば棘のちひさく抗へり
経蔵の中に経蔵落し文
生憎と言はれて旅の緑雨かな
ひろしまに舞ふ螢火や無辜の民
老鶯や雨に丹波の山鎮む
螢袋おやゆび姫のやどりとも
額に日を浴びて男の子や祭山車
蠅螟や実家更地となりたるに
モロッコの迷路の街やラムネ売
指先に麝香の香る更衣
名刹の庭が近道夏帽子
聖五月夜明けを告ぐる鳩のこゑ
はじけたる薊の赤や魚捌く
ぼうたんや眼福得しと杖の祖父
恐竜を前に吼ゆる子夏来る
卯の花や小流れの音透きとほり
夏の夜の酒場にヒロシマを語り

朝田玲子
大石高典
小嶋 和
碓氷芳雄
森 壹風
中島冬子
福江ちえり
西五辻芳子
富沢壽勇
河村純子
仁田 浩
川内一浩
牧田満知子
鴻坂佳子
谷口文子
竹中教子
田中 勝

ふくよかなるボテロの絵画春深し
泰山木咲くや階段登り詰め

芍薬の蕾に穴やなにか棲む
群鳥に揺るる一木さくらんぼ
ひもすがら山の子あそぶ潮干潟
羽休めること知らぬげに夏の蝶
出張の荷とて地味なる水着とす
初夏や消印淡きエアメール
大鯛の当たり来ぬまま目借時
渦潮や人形浄瑠璃に涙
初夏やアオザイ揺るる五条坂
地下足袋を脱ぎし夕べの缶ビール
白亜紀の岩に蟹追ふ遠足子
G7に願ふ祈りの清和かな
江戸つ子の粋なはちまき初鯉
水の土ぬるく絡まる芒種かな
鈴生りや道の割れ目の小判草
母の日の母なき街を歩きけり
境内を袴ぞろぞろ桐の花
山肌の雲のかげ濃し夏来る
牛突きの勝負の後にビールかな
船室に置き忘れたり遍路笠

片山旭星
中井昭雄
氷室集
齋藤亜矢
朝田玲子
仁田 浩
加藤 剛
小嶋 和
森 壹風
大石高典
竹中教子
谷口文子
碓氷芳雄
鴻坂佳子
田中 勝
森川恵美子
牧田満知子
福江ちえり
小堀尚美
中井昭雄
西五辻芳子
宮原亜砂美
田中白秋

2023年7月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

ドリーネに吸込まれゆく若草野
木の根明く出羽三山の社の辺
さへづりや比叡を目指す雲母坂
こぬか雨すべりだしたる花見舟
朧めく自由の二文字吉田寮
実朝の海へ花散るひとりなり
持ち重りする猫とみる春の宵
腰掛と思ふ切株薬ゆる
釈迦堂の屋根の反りへと山桜
野遊や幼なりユックにおむつ負ひ
湯返しの湯気立ち上り雪柳
琵琶湖より来たる流れや花筏

仁田 浩
中島冬子
片山旭星
朝田玲子
大石高典
川内一浩
河村純子
中井昭雄
小嶋 和
大野邦夫
丹羽康夫
竹中教子

竜天に登る予感の音なき日
地球儀に争ひは無し春の空
亀鳴くやミサイルの飛び来る話
門柱に貸家と貼られ春の果
春筍を画布に残して皮を剥く
町なかの扉開ければ葱坊主
津波耐へし女川桜いのち継ぐ

花冷のリンカーン像ぼつねんと
ミステリー三本立ての春の夢
同じうに前歯抜けてみて新学期
街道の朝しづかなり花水木
雲珠桜天狗は山に息ひそめ
梅若忌しつかと繋ぐ親子の手
酒少しに酔うて寂しき遍路かな
鯉の背捌くや深き海の色
枝先を揺らすいきほひ巣立鳥
三右衛門新田礫へ芋を植う
喧騒を包むがごとし二重虹
牧場の草の波立ち雉の声
オンザロック氷の音と遠蛙
筍を食らふゴリラの無心かな
つぶやきをこそ前向きに春ひとり
畦道にラジオの響く春田かな
葉や見知らぬ苗の育ちたり
春深し揺るる大樹に風の音
鮫皮におろす山葵の味深し
御母衣湖畔の老桜二つ桜守

田中 勝
碓氷芳雄
富沢壽勇
森 壹風
友永基美子
谷口文子
西五辻芳子
氷室集
福のり子
齋藤亜矢
仁田 浩
朝田玲子
竹中教子
河村純子
田中白秋
牧田満知子
津嘉山典
丹羽康夫
碓氷芳雄
福江ちえり
森 壹風
大石高典
小鳥 和
片岡和子
中井昭雄
田中 勝
富沢壽勇
西五辻芳子

2023年6月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

雪間草つぎの一步ほどの深さ
鶏の序列さだかに花の下
放つ牛の待つ牧場の草青む
外したるピアスの重さ春の宵
西行庵去り難きときやまざくら
怪物も共に干さるる白子干
卒業の寄書いまにランドセル

氷壺集
朝田玲子
仁田 浩
大野邦夫
牧田満知子
中井昭雄
大石高典
碓氷芳雄

鳥居まで届けと願ふ石鹼玉
振り出しに戻つてしまふ春の夢
乾びたる奥城所すみれ咲く
はくれんのつぶてほころぶ城の空
春浅し最後の講義準備して
小千谷出の祖母は厳格雪晒
農園に日がなひとりの日永かな
夕暮の路地明るくす雪柳
吾を呼ぶやう小さき命いぬふぐり
あたたかやピンク廻しの宇良の勝
雄鶏が時を告げたり春の風
報告書これにて終はる日永かな

師の泣き笑ひ子の泣き笑ひ卒業す
登校の道下調べ春の宵
桜鮓今よと群る美山川
梅が香をたどり入りたる鹿の苑
学位記の三つ並びぬ山椒の芽
シーソーの跳ね春の空押しあげて
雪形の兎現はれ吾妻山
蹴上駅の蹴の字の上や燕の巢
ことさらに潮目際立つ春の海
花冷の指先にあり筆を執る
春眠しかしやと躡く鳩時計
通り雨身を盾にして桜餅
花便り地図と合はせて時刻表
春の山黙して遊ぶ鳥はみず
震災の復旧の田へ燕の来
残る鴨まばらに群る大和川
登り来て思案処の桜かな
京番茶ミルクに煮出し春の宵
初めてのひとりの旅へ春休
池の端や蛙のあとにまた蛙

片山旭星
河村純子
西五辻芳子
福江ちえり
小畠 和
鴻坂佳子
富沢壽勇
田中 勝
川内一浩
中島冬子
谷口文子
丹羽康夫
氷室集
福のり子
碓氷芳雄
大石高典
齋藤亜矢
福田将矢
朝田玲子
富沢壽勇
小畠 和
仁田 浩
福江ちえり
鴻坂佳子
牧田満知子
森川恵美子
河村純子
中村順次
加藤 剛
中井昭雄
大辻 都
谷口文子
城戸崎雅崇

2023年5月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

綿厚き鬼の着ぐるみ節分会
堤防の海へ迫り出し初日の出

仁田 浩
小畠 和

析芽吹く環状木柱列の空
春しぐれ錫の茶托の鈍き艶
初午や畑菜買ふも安からず
公魚の香りに満つる金盥
獲れ高を嘆きながらの蜆漁
雉走る寺と地続き村役場
言ひ訳はせず判を押す二月尽
約束は果たされぬまま春の雪
葉より開く頁や春炬燵
湯上りの髪のしづくや雪女郎
ひざ枕右に左につくしんぼ
春泥を構はず歩む鳩のをり
幽かなる漁港のゆらぎ月朧
雨女なごり雪とて連れ歩く
春浅し参道脇の木のベンチ
二ヶ月や締切までの指を折り
雛迎へひとりくらしの華やいで

九・一一跡に雪降る霏霏と降る
生きものの道の交はり雪の上
すりこぎも貴船育ちや木の芽和
料峭や空車来ぬかと銀座の夜
支へ木の爪となりたり臥竜梅
ペンにある母校の名前卒業す
落椿ねむの木村の静かなり
八甲田ひとたび暮れて雪煙
式目を掲ぐる祇園青柳
春泥に地熱をひめし大地かな
青き鞆む真白き靴を迷ひなく
春荒に重機の如くあらがうて
水中に黒き点追ひ白魚舟
風にあそぶ髪の軽ろやか春隣
透きとほる川の蜆は川の色
春の音流るる宇治十帖の川
雪だるま葉つばの耳を貰ひけり
ヤーコンのきんぴらしやりと春兆す
生きてみる証の痛み母に春
豆撒はポップコーンとシカゴの子

福江ちえり
朝田玲子
中島冬子
大石高典
大野邦夫
鴻坂佳子
牧田満知子
川内一浩
中井昭雄
河村純子
碓氷芳雄
田中 勝
富沢壽勇
西五辻芳子
片山旭星
丹羽康夫
栗本一代
水室集
福のり子
齋藤亜矢
鳥居裕子
朝田玲子
仁田 浩
福江ちえり
大石高典
河村純子
中井昭雄
田中 勝
宮原亜砂美
富沢壽勇
小堀尚美
牧田満知子
前田鈴子
竹中教子
谷口文子
鴻坂佳子
石原ゆき子
小堀恭子

2023年4月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

手斧跡残る柱へ松飾

豆荷札付く晦日蕎麦持ち帰る

面取れば顔の火照りの寒稽古

息浅くまた潮を吹く勇魚かな

寒雷に黙してゐたる散居村

逆光に鍬持つ影の冬の朝

ほの暗き雁木の町屋絵蠟燭

ゾウガメののたりどたりと冬日向

ざわめきを切りとるやうに歌留多飛ぶ

空祓ふ正月凧の高きこと

茶工場の碾臼廻る五日かな

春節や京劇女優の変面も

天龍寺の色なき庭の寒牡丹

七草や額に朱印の修正会

橋渡る路面電車や冬の夜

菜を洗ふ寒九の水の白さかな

雪うつすらと畑の横の石仏

飼ひ犬の皿にどきりと七日粥

気が付けば炬燵に目覚め四畳半

二人の名アルファベットの祝箸

ぬか床へえいと手を入れ寒の入

なま物は玄関に置き寒の入

東雲の朱のあはあはと雪しづり

寒禽の声の遠のく一の宮

初釣や焼津の海に富士浮かぶ

凧の行先いづこ風見鶏

山眠る摂氏一度に姫鼠

初釜や兎尽しのあれやこれ

木菟よ鳴け銃後の母の声に鳴け

寒晴や関帝廟の親子獅子

雪晴や蔵の白壁なほ白し

粉雪や休火山とふ甲山

蠟梅の蕾あまたのなか一輪

線の妙こだはり通す筆始

蕎麦食ぶること節分の吉田山

草いまだ少なきところ春の駒

氷壺集

仁田 浩

朝田玲子

大野邦夫

西五辻芳子

福江ちえり

碓氷芳雄

鴻坂佳子

大石高典

牧田満知子

河村純子

中島冬子

富澤壽勇

中井昭雄

谷口文子

田中 勝

竹中教子

片山旭星

宮原亜砂美

川内一浩

氷室集

福のり子

鳥居裕子

仁田 浩

朝田玲子

福江ちえり

大石高典

津嘉山典

福田将矢

河村純子

牧田満知子

富澤壽勇

大野邦夫

西五辻芳子

中井昭雄

小堀恭子

竹中教子

山中伊蘭子

和紙工房始業の湯気や鳥糞松
膝に置く手や霜焼を隠しをり
上州に木遣の響き達磨市

鴻坂佳子
大畑照子
森川恵美子

2023年3月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

自然薯の先を残して山下りる
規格外の大根小さうて旨きこと
顔見世や花道くぐりお茶買ひに
蠟石の円を跳び跳ぶ小春風
笹鳴や吾の影淡く藪に置く
熱爛の一本ごとに増ゆる法螺
鱈切ればまな板せまし日暮どき
焼酎の湯割濃くなるちやんちやんこ
地球にも重荷ありしか冬怒濤
昔日の匂ふよ切干を戻し
初雪や何も書けずに日記帳
もう歳を取らぬあなたと冬夕焼
縫針のちくりと刺さる一葉忌
軍刀を溶かしし鐘や除夜に鳴る
比叡風身をちぢめては伸しては
山茶花や軽やかに掃く朝の作務
念入りに仏具磨きて年の暮
山越えて出来栄え競ふ神楽かな
お焚上げの品を託して年の暮

仁田 浩
朝田玲子
中島冬子
福江ちえり
小 和
大石高典
牧田満知子
碓氷芳雄
河村純子
谷口文子
片山旭星
川内一浩
中井昭雄
西五辻芳子
竹中一花
鴻坂佳子
大野邦夫
丹羽康夫
富沢壽勇

氷室集

合併を生き抜きし名の山眠る
大陸を走り続けてなほ枯野
寒風や羊歯の胞子の並びやう
釣銭を出す手ほのかに酸茎の香
消防塔へ片足かかりオリオン座
漱石忌鐘鎮座する鏡の間
海鳴りをひくく引きずり冬の霧
輪廻転生落葉の下の数センチ
ストーブの熾火の前をどかぬ猫
山茶花やきよんの飛び出る夜道なり
火箸ちんと鳴る埋火を起すとき
書き進む手の影の濃し冬至の日

仁田 浩
福のり子
朝田玲子
鳥居裕子
鴻坂佳子
河村純子
牧田満知子
齋藤亜矢
小 和
大石高典
中島冬子
大辻 都

書出しの言葉探りぬ冬の夜半
まだ咳の残りしままの煤払
冬の夜や酒場を出でて星数へ
畑の葱の甘さ増したり空つ風
原稿の進み進まず小夜時雨
鳥のこゑ小さく近く冬田かな
応急の道路間に合ひ里神楽
故郷の味が染み込む雑煮かな

森 壹風
谷口文子
片山旭星
森川恵美子
富沢壽勇
宮原亜砂美
丹羽康夫
田中 勝

2023年2月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

星近き山の厩舎よ冬支度
諸を手に子ども寄り来る落葉焚
精進のイクラの本地蒟蒻に
夜神楽や闇を突くごと天狗面
月食は月よりの文冬に入る
焼米のおやつの椀の香り立つ
鉄棒に鉄の匂ひや冬に入る
小春日や踏むたび違ふ木橋の音
深秋や足音のみの山毛櫨の道
締切の矢継ぎばやなり神の留守
熱爛や人待つ仕草何となく
言ひ訳を重ねてゐたり卯酒
渋柿の蒂にシングルモルトかな
太陽が味方に変はる秋の朝
母の踏む朴の落葉を子守唄
風花や涙の先のその先に
立冬の月食観むと街かどに
日の角度低きに冬の立つを知る
熱爛に悔いの重みのほぐれけり

朝田玲子
中島冬子
富沢壽勇
森 壹風
片山旭星
仁田 浩
谷口文子
福江ちえり
中井昭雄
大石高典
河村純子
牧田満知子
丹羽康夫
石原ゆき子
鴻坂佳子
川内一浩
小畠 和
碓氷芳雄
大野邦夫

氷室集

息潜め鹿の歩みし道辿る
逃亡の奴隷匿せし霧深き
大絵馬の木目浮きたる冬隣
負けん気の嬰の泣き声雪起し
野を駆けし昨日のいのち牡丹鍋
銀鼠に舟の消えゆく夕時雨
予想より深き土なり大根引

齋藤亜矢
福のり子
仁田 浩
小堀尚美
牧田満知子
朝田玲子
大石高典

鉄溶かすキューポラの湯や櫛紅葉
ジャズを弾く津軽三味線初時雨
今年の恵みに礼の案山子揚
上流に尻を向けつつ浮寝鳥
氷張る轍の深き一町田
猫と居て雨の匂ひの秋深し
時雨虹置き去り姥捨山の端に
あかあかと雨後の紅葉となりにけり
木枯しの夜や微かなる木々の音
軒下に猫の重なる初時雨
機上より月と星あり神無月
骨組みを見上ぐる冬や恐竜館
踏むごとに和音奏づる落葉かな

中井昭雄
谷口文子
浅利美鈴
富沢壽勇
福江ちえり
河村純子
丹羽康夫
西五辻芳子
片山旭星
小畷 和
田中 勝
碓氷芳雄
津嘉山典

2023年1月

氷華集

当月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

流星へ骨の恐竜吼え上ぐる
秋の日の三栖閨門へ舟停まる
落人の潜みし洞や地虫鳴く
赤げらの叩く社の穴暗し
鹿なくや浄闇となるお仮殿
行く秋の御苑や鳶の輪の低く
鶉は赤き実ねらひ頑固者
挑むとも祈るとも見ゆいぼむしり
小鳥来て良き一日となりさうな
獣医師を指す子にある夜学の灯
ヒンドゥーの森の祠やましら酒
鴨飛んで朝日は山を離れけり
猫の手へ大かまきりの仁王立ち
山の端に置かるるごとし十三夜
威銃打つ次の音構へけり
右の竿左の竿と鯊釣れて
鳥のゐる廃墟の窓や秋の暮
鉄橋の大きく響き夜半の秋
山へ片道二時間の蕎麦を刈る

仁田 浩
小畷 和
朝田玲子
佐々木成
西五辻芳子
碓氷芳雄
河村純子
中井昭雄
谷口文子
植田清子
富沢壽勇
福江ちえり
大野邦夫
片山旭星
川上和昭
大石高典
田中 勝
中島冬子
丹羽康夫

氷室集

闇来るを待ちみて烏瓜の花
臭木の実に染むる絹糸甕覗

鳥居裕子
福のり子

輪を描くくさびらぐるりと辿りけり
朝寒やパリのカフェなる隅の席
旅人を加へて村の運動会
鉄より落ちくる柿や掌に重き
タバスコペッパーの学名知りぬ秋の庭
仏壇を閉ぢ台風に備へけり
色鳥の知らずや止まる藤戸石
若宮へ入御のときなり鹿の声
畑一枚隔つあいさつ菊残る
川淵に番所の跡や鴟猛る
猪鬣を掛けし漢や里を守る
フランスパン小脇にはさみ朝寒し
地下道に靴音響く夜寒かな
星月夜しじまの奥に跳ぬる音
魯田やぼつんぽつんと鷺遠し
古民家に遺るアルバム鬼やんま
根菜の炊ける匂ひや秋深し
おばあちゃんの知恵伝ふるも芋茎かな

齋藤亜矢
小畠 和
仁田 浩
朝田玲子
大辻 都
中島冬子
河村純子
西五辻芳子
鴻坂佳子
佐々木成
大野邦夫
浅利美鈴
片山旭星
津嘉山典
福江ちえり
大石高典
谷口文子
富沢壽勇